

氏 名：山本 由子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 138 号

学位授与年月日：2015 年 9 月 15 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 麻原きよみ（聖路加国際大学教授）

副査 亀井 智子（聖路加国際大学教授）

副査 廣瀬 清人（聖路加国際大学教授）

副査 黒川由紀子（上智大学）

論 文 題 目：特別養護老人ホームに入所する認知症高齢者へのライフレビューの効果の
検証：ランダム化比較試験と混合研究法を用いて

博士論文審査結果

本研究は、量的データと質的データを収集して統合した混合研究法であり、特別養護老人ホームに入居している認知症高齢者へのライフレビューの効果、抑うつ、生活行動、スタッフとの社会的交流について、ランダム化比較試験で検証したものである。介入群 30 名、対照群 30 名を割り付け、4 回のライフレビューセッションを実施し、ベースラインと実施後の 2 時点で抑うつ（GDS）、行動変化（MOSES, Vitality Index）を測定し、セッション中は参加観察、対象者の語り（文字数）などのデータを収集した。結果として、介入群、中でもうつ傾向にある者、中等度認知症の者に抑うつ効果が有意にみられたが、生活行動および抑うつ行動に変化はみられなかった。以上から、ライフレビューは、抑うつの低減に有効であることが明らかとなった。

審査において主に以下が議論され、修正が求められた。

方法論については、論文全体において混合研究であることを一貫して記述すること、その際に研究手順の図などの提示が必要であること、また、量的データと質的データの収斂が十分ではないことが指摘された。さらに、刺激（写真など）の統制に関する説明と、対照群に行った「通常の施設ケア」の説明、および対象になぜ 60 代を含めたかの理由が必要である。

分析については、混合研究法を用いているが、質的なデータの分析が十分ではないことが指摘された。ライフレビューの実施によって、抑うつの改善（GDS の変化）がなぜ生じたのか、事例や対象者の語りなどの質的分析が必要である。また、GDS の変化量と対象者の語り、スタッフの回答を joint display したものがわかりにくく、量的データによる結果の質的データによる解釈が示されていない。

考察については、GDS では抑うつ効果が見られたが行動変化を測定した MOSES の下位尺度では変化が見られていないことについて考察を深めること、および抑うつ効果に関して、本研究の経過・結果に即して研究者の考察を加えることなどが指摘された。

以上の指摘に対して、審査後に修正・加筆が行なわれ、審査委員から確認が得られた。本研究は、認知症高齢者という難しい対象者に対して、果敢に RCT に取り組んだ意欲的な研究であることが高く評価された。また、本研究結果は、施設の認知症高齢者への効果的なプログラム、および支援方法についてのあり方を示すものであり、その検証方法に方向性を提供するものである。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。